

感じること 感じたあとのこと

福のり子

芸術表現・アートプロデュース学科教授

「感じる」というお題をいただいた。知覚入力された後の、人の情動反応のすべてを意味するこのテーマで文章を書くのは、深淵すぎて手に負えるかなと、感じた。このお題をもらったとき、まず頭に浮かんだ言葉が「感性」。美術教育に携わっていると、いやというほどこの言葉を耳にする。文部科学省の中学校学習指導要領「美術」の最初に掲げられた「目的」にも、「感性を豊かに」とある。感性は個人差が大きい。正しい答えもない。点数を付けることを大前提として行われている現在の教育で、どうやってそれを評価するのだろうか、ふと思う。

もちろん感性は大切だ。生まれたときには白紙の私たちは、美しいものを見て育って初めて、「美しい」と感じ、危険なことを経験して初めて、「危ない」と感じるができるからだ。こういった情動反応なしで人は人生を楽しむどころか、生き延びることすらままならない。「感じる」を類語辞典で牽いてみる。「手ざわり」に始まって、「覚える」「共感する」「意識する」「刺す」「予感する」、あるいは「認識する」「納得する」など、64もの類語が並んでいる。

焼けた鍋に触って「熱い！」と「感じる」と、「納得する」とは同じだと言われればそうかもしれないが、その間にはずいぶん隔たりがあるように感じる（これは、類語辞典などの言葉に近いのだろうか？）。それにしても、私たちはいったいどういうメカニズムでものを感じているのだろうか？

ある学生が私に、科学ジャーナリスト、トール・ノーレットランダーシユの著書「ユーザー・イリュージョン意識という幻想」を紹介してくれた。著者は数々の科学的根拠を示しながら、人間の意識／無意識の間に光を当て、「意識は錯覚にすぎない」と述べる。私はまだこの本を読んでいないので、学生から聞いたことをまとめてみる。

「人間はその全身で処理している情報のおよそ百万分の1だけを、0.5秒後に「意識すること」ができる。言い換えればそれだけしか意識できないということだ。無意識のなかで情報は、それまでの経験や記憶に基づいて編集されたり処分されていく。つまり、「意識すること」は、私たちが意識しない間に脳が行っている様々な作業の百万分の1の結果にすぎない。」

「意識する＝感じる」ということは、莫大な作業を脳がした後に残った、

なのだ。そしてそれは、自己とは自分のなかだけで生成されるのではなく、他者との関係によって作られるということを認識させてくれる。

己をより知るためのもうひとつの方策は、「悟性」を働かせること。悟性については西洋の哲学者たちが様々な解釈を行っているが、これは禅宗でも用いられる用語である。一般的な解釈はこうだ。直感で感じることを感性とすると、その対局に理性がある。理性とは、「感じる」というような情動反応にはとらわれず、概念的、道理的なものごとを判断する能力をさす。感性と理性の中間にあつて、感じたことを理論的、かつ抽象的に考察する知性が悟性。意識上に表れた思いを、なぜ、どうしてと問う力だ。私たちは他人の感情を感じることはできない。しかし、悟性をもってすれば、他者の痛みを想像することも可能になる。

感性が受動的なものであるとすれば、悟性は能動的にしかなし得ない。自らが、疑問を持って働きかけなければならぬのだ。「なぜ、そう思ったのか」「なぜ、そう感じたのか」それを言語化していくことで、少しは自分自身に肉迫できるかもしれない。

人間は様々な「体験」をしている。しかしそれが我が身に刻み込まれた「経験」となるためにも、悟性が必要だ。美術史家のケネス・クラークは「美的感動はオレンジの香りが残る間しか残らない」と言う。だからこそ感性が経験となるために、言語化は避けて通れない。

例えば、ある作品をみて「きれいな赤色。これ好きだわ」と感じたとする。しかしこれだけでは、その作品をみたという「体験」はできたが、まだ「経験」には至っていない。美術館で人がひとつの作品を鑑賞する時間は、通常十秒前後だと言われている。「きれいな赤色。これ好き」はその程度の時間だ。

しかしその後、「どこが、きれいな？なぜ好きなの？」と自問してみたらどうだろうか。それに答えるためには、もつと作品をみなくてはならない。すると、最初に気づかなかった要素に、はたと気づくかもしれない。「きれいな赤色」と思った部分に動物の内臓が張り付けられている！「ギョッ」としたあなたは、「気持ち悪い、この作品嫌い」と当初とはまったく異なる感じを抱くかもしれない。再度、考えてみよう。「なぜ動物の内臓なら嫌いなのか。もし「かわいそうだから」と思ったら人は、自らの動物愛護精神に気づくかもしれない。さらに考えてみる。

ほんのわずかな部分でしかないのだ。それにも拘らず、自分が感じていることが全てだと思ひ込み、その結果、「私のことは私が一番よく知っている」と思い込む。私たちは自分の脳にだまされている。

私たちを騙す脳は、私たちを救ってくれてもいる。焼けた鍋に触って「熱い！」と感じた人は、意識ではなく、無意識に手を引つ込める。伝達に0.5秒かかる意識とは異なり、無意識は0.15秒足らずで「手を引つ込める」と命ずることができからだ。意識の反応を待っていたら、火傷をおうところだ。脳に無意識が沢山あつてよかった…。

それにしても、氷山の一角しか意識的に知覚できない「自分」とは、どんなものなのか、もう少し知りたいと思う。その方策を考えてみよう。まず、無意識の存在を認める、つまり私が知らない「自分」がいるということを確認することだ。そうすれば、人はもう少し自身に寛大になれるし興味を持つこともできる。だって、何が知りたいって、自分の知らない自分ほど知りたいものはないからだ（少なくとも、私はそうです）。それに、「もう絶対にだめだ」と絶望に陥ることも回避できるかもしれない。「私のことは私が一番知っている」という傲慢な態度を改めて、他者の意見にもう少し耳を傾けられる。自分では気づかない自分を、他者は気づいているかもしれないからだ。

私の顔は私の所有物で、私を私だと証明する最も重要で手取り早いもの。それにも拘らず、私は、私の顔を立体でみることができない。私の背中も私のものだが、実物をみることができない。しかし、私の回りの人たちはその両方をみることができ。自分をみるためには、時に、他者の目に映る自分の姿をみる必要がある。他者を、自分を映す鏡とすること。これが二番目の方策。

「鏡像段階」説を唱えた心理学者、ジャック・ラカンも同様のことを言っている。乳幼児はまだ自分の体を、まとまりを持った統一体として把握できない。しかし乳幼児でも視覚はかなり発達しているから、鏡に映った自分を見ることができ、自らの体を統一体として認識することができる。この体験が、自我の目覚めへとつながる。これは決して乳幼児に限ったことではない。成長した大人である私たちもまた、意識と無意識の混沌とした間の中にある、未発達の生き物なのだ。だからこそ己を知るために、他者という鏡に映った自分の姿をみることが私たちにも必要

「なぜ、かわいそうだと思ったのか」その時ふと、さっきハンバーガーを食べたことを思い出す。「ハンバーガーの肉ならいいのに、この作品の内臓はだめなの？」とさらに問う。そこで「芸術作品は、もつと高価で豪華な素材じゃないとだめ」と思った人は、自分の中にある「芸術の価値や基準（高価で豪華）」に気づく。別のことを考える人もいるだろう。「どういえば、普段、内臓なんか捨てていた。それを再利用しているエゴ作品。いいわ！」こうして自らのエゴロジへの意識が、芸術作品を鑑賞するときにも影響していることに気づく。あるいはこう思うかもしれない。「普段目につかない、捨てられるような気持ち悪いモノに注目して、それを一見美しいと思わせ、私たちを驚かせている。しかも、芸術の概念についても考えさせてくれる作品だ」最初とは異なった理由で、あなたはこの作品が好きになるかもしれない。

ここまで鑑賞するには、時間が必要だ。十秒だけみて通り過ぎた人より、こうして自問自答しながら作品をみた人の方が、より鑑賞経験を積んだことになる。そしてこういった経験こそが、「私たちが意識しない間に脳が行っている様々な作業」に関与するのだ。

他者に限らず、芸術作品もまた自己を映す鏡である。ノーレットランダーシユは「意識は幻想だ」と述べているが、芸術もまた然り。例えば絵画。それはただの絵の具を塗った布でしかない。写真も同様。印画紙の上に、光と科学溶液が生み出した陰影にしかすぎない。でも私たちはその絵の具の盛り上がりや白黒の濃淡をみて、「美しい女性だなあ」と憧れたり、「残酷な場面だ」と心を痛めたりする。なんと「幻想」アートとは、そこに存在しないなにかを、そこにみるという行為と言える。作品を「布と絵の具」としてだけみないからこそ、そこに立ち上がってくるなにかがあるからだ。「なにかが立ち上がる」それこそが「感じる」ということ。作品に限らず世界を理解するためのすべては、ここから始まる。しかしそれは、あくまで出発点にしかすぎない。私たちが悟性を駆使して初めて理解は深まり、そしてより磨かれた「鏡」となって、それらは私たち自身を映し出すようになるからだ。

「悟る」とは「全てをわかる」ではなく、「わからないということを知る」「ことを言う」「どこまでも問い続ける。いつまでも答えはない。」谷川俊太郎のこの短い言葉は、悟性の本質を見事に語っている。